

は じ め に

田辺市の自然は、農耕地の拡大や自然林の減少によって、たしかに荒廃してきました。しかし、くわしく調べてみると、和歌山県下でも数少なくなってしまった重要な生きものが、まだまだ市全域のいたるところに見られます。私たちは、これらの生きものが、いつまでも田辺の市民として、共に生き続けることを願って、この小冊子をまとめました。

田辺市は紀伊半島南部の西側にあり、海が南西から陸地側に深く入り込んだ形をしています。黒潮の影響を受けて、年間の平均気温が16.7℃、夏涼しく冬暖かい温和な気候に恵まれています。ところが、内陸側には龍神山・三星山・高尾山・横山などの山々が並んでいるので、その影響もあります。雨量は海岸で1,500から2,000mm、山間部では2,000から2,500mmと多くなります。雨は梅雨期と台風時に集中する傾向がありますが、冬でも多少の雨が降り、雪はめったに降りません。

地質は全域が堆積岩で、海底に堆積した時代は、紀伊半島で最も古い新生代第三紀にあたり、北半分は少し古い古第三紀（約5,000万年前）、南半分は新第三紀（約1,500万年前）になります。この地域には火山も火成岩も分布していませんが、市周辺の各地に温泉があります。これは紀伊半島南東部の那智山方面に広がる火成岩（熊野酸性岩）に関係した地下の熱源によるものだと考えられています。この複雑な地形と温暖多雨という気候条件に恵まれて、昔はすばらしい暖地性の森林（照葉樹林）が広がっていました。市内に点在していた社寺林や神島にそのおもかげが残っています。特に神島は、南方熊楠が縄文の森として後世に伝えようとしたタブノキの巨木林でした。現在では、その巨木は枯れてしまいましたが、それでも貴重な動植物が生育し、国指定の天然記念物としての価値は、全国的に高く評価されています。

改訂にあたって

「田辺市の自然観察ガイドブック」は、故後藤 伸先生が中心になって作成されました。作成されてから 17 年が経過したことから、今回、小規模ですが改訂を行いました。

平成 17 年（2005 年）5 月に、田辺市、大塔村、中辺路町、龍神村、本宮町が合併して、新しい田辺市となり、その市域は海岸部から奈良県との県境まで広がっています。また、平成 27 年（2015 年）に吉野熊野国立公園が拡張されたことにより、串本町からみなべ町（千里の浜）までの海岸部と「ふるさと自然公園センター」のあるひき岩群、そして、龍神山と奇絶峡が県立自然公園から国立公園へと格上げされました。

今回の改訂では、これまでの旧田辺市内の内容について、17 年の間に今はもうほとんど見られなくなった生きものや、逆にかつてはほとんど見ることができなかったが、今はたくさんいる生きものなどを見直しました。また、本文と写真の整合性を整え、いくつかの写真については、差し替え等を行いました。地図も新しいものにしました。最近話題になることが多い「外来動物」については、アライグマ、ハクビシン、ミシシippiaアカミミガメ、アフリカツメガエルについての説明を追加しました。

「はじめに」と「おわりに」の文書については、後藤先生の思いを大切にしたいと考え、そのまま残すことにしました。

2017 年 3 月